

地学漫筆 No. 2

おのころじまと日本列島

(絵とも) くらた・のおお



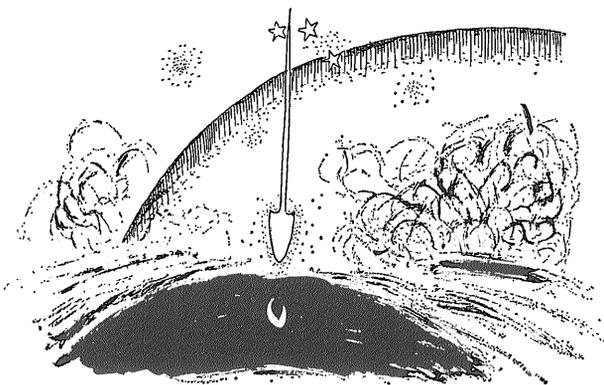
そのむかし 世界という
果てもなく大きなくらや
みが 目も鼻もない およ
ぶよのかたまりで とろり
とろりと河が浮いているよ
うに 空の中に浮かんでい

た。やがて ときがきて このまっくらやみが そ
のなかからかすかに動きだして ふわふわした軽
いガスのようなものが 上へ上へとあがっていき
そこに天が生じ 反対に重い だろだろのものが
下へ下へとさがって行って そこに地ができた。
こうして天と地とが分かれはしたものの 天は紺
青の色をたたえるにはほど遠く 地もまた海陸の
区別もつかぬ 今にしていえば 湿原に浮ぶ 谷地
坊主 にもたとえられるような ありさまであっ
た。そして次にはわが愛すべき“神話”による
といくたりかの“神”が 春がきてあしの芽がで
るように生まれてくるのである。男神のいざな
ぎ女神のいざなみが その中に入っている。こ
れらの神たちは 先に舞台装置の整った“高天原”
に集まって なおもあいかわらず だろんとした
ままの地の上に 国づくりの相談をする…… そ

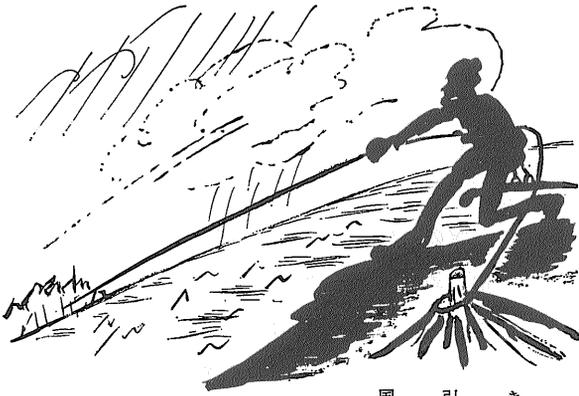
してその結論によって いざなぎ いざなみの男
女神が“あまのぬぼこ”と称せられるおおきな矛
をもって 下界にくだってきた…… という順序
で神話がかかれている。

いざなぎ いざなみのアベック神は 高天原の
下につながる浮き橋の上から 泥沼のように見え
るまっくらな地の上を“あまのぬぼこ”をもってま
さぐってみると どれもこれもやわらかなものが
ふわふわ水の上にただ浮いているといったありさ
まで はじめは下り立つべき場所をみつけるのに
苦勞するほどであった。 たまたま何回か水に
の上をかきまぜていた“あまのぬぼこ”の先端が引
きあげられたときに 滴がたれおちて そのたれ
おちた滴がみるまに 塩のようにかたまり やが
て小さな島がそこにできあがったという。 おの
ずとかたまった…… その“おのころじま”こそ
わが日本の一番最初の国土にほかならない。 そ
れがどこかということを示していないが
そのあと “いざなぎ”“いざなみ”の男女神は その
おのころじまで夫婦のいとなみを行ない 合計八
つの島を産み育てることとなった。 一姫が淡路
島 二太郎が四国島 そして3番目が 隠岐の島
4番目が九州島 5番目が 壱岐の島 次いで対馬
(対馬)に 佐渡が島 最後の8番目に一等大きな
本州 つまり“おおやまととよ秋津島”が生まれた
というわけである。

この家族構成の順序でいくと あまのぬぼこの
先から したたりおちてできた おのころじまは
あるいは小豆島であったかも知れないし 南の屋



久島かあるいはまた 北の北海道であったかも知れない。大きな北海道がこうした神話の上で名がでてこないというあたりに 北海道という島の特異性があらわれていて興味深い。ともあれこうして わが日本の国土は アベック神にまつわる神話の上で かたどおり誕生したことになるのであるが 神話はさらにその後のこれら生まれてた子供たちの発育史について かなりのディテールにまでおよんでいる。

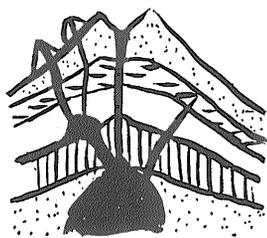


国 引 き

すなわち いざなぎ いざなみの協力で生まれた島々は 次第にかたまって 周囲に海をめぐらし 島の上には山がそびえ 川が流れ 草木がしげり やがて人間が生まれ その人間は昼の間は天に輝く日を そして夜になると同じく天に輝く月を仰ぐとともに ときには雨や風によるこびと 悲しみを教えられるようになってきた。いざなみを母神とする すさのおのみこと はたいへんな悪神として神話の上でさかんに活やくするが とくに力が強かったというフィクションが あちこちで島のかたちに整形手術を加えている…… そのあたりなかなか面白い。神話のなかにでてくる国引きという章では 出雲の国 現在の島根県下をめぐり歩いて “帯のようにせまくるしいところだ 土地をつぎ足してみよう” と思い立って 海上はるかに望見した朝鮮半島の突っさきにすきを入れてそれを切り放し きり離れた陸地を綱でたぐりよせ 杭にしぼりつけたという。こうして たぐ

りよせられたのが 小津の浦から出雲大社のある杵築のみさきの間の海岸で 杭を打ったのが 三瓶山だという。このほか能登半島にも目をつけて 珠州の崎の先っちょを切りとって 海上をたぐりよせたのが美保の崎 同じく打った杭が伯耆大山になったのだともいう。

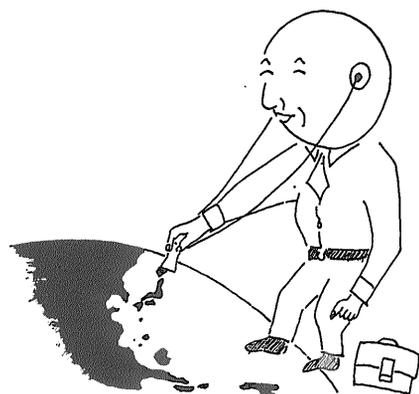
このようにして “すさのおのみこと” が 海岸や山をつくったことになるのであるが その曾孫に当る “おおくにぬしのみこと” もいくつかの国づくりをしている。彼は 因幡の国 いまの兵庫県北 氣多の崎の海岸で赤肌のまま 砂の上をころげまわっていた白兔に親切な治療の方法を教えた若く美しい男神であるが 同じく美保の崎の海岸で拾いあげた 掌の上にいるような小さな “すくなひこのみこと” と協力して 土地を開拓し 畑を耕すことを普及させて 荒地を沃野にかえることに精をだしている。日本の国はこうして間もなく あしやすげの長い穂がそよ吹く風になびく いわゆる葦原のみずほの国が生まれてくるというわけである。その “おおくにぬしのみこと” が “すくなひこのみこと” と連れ立って歩いていたとき つれづれなるままにかけをすることを考えだし “おおくにぬしのみこと” は小用を1日中せずにがまんし 一方 “すくなひこのみこと” は身体の何十倍もある大きさの土をつめた袋をかついで根くらべすることと相なった。ところで “すくなひこのみこと” は重たい袋をかついでずんずんと先に歩いていき 出雲から播磨までできてしまったがそこで “おおくにぬしのみこと” の方は 小用がしたくてしたくて いちにもがまんできなくなっにかぶとをぬいでしまう。そしてその “おおくにぬしのみこと” の小用は 三国岳から流れだしていまの兵庫県市川となり “すくなひこのみこと” が “勝った 勝った” といいながらかついできた土をぶちまけたのが 埴岡 (はにおか) という小山になったという。神話によると四国の道後温泉も



この2神が 退屈ま
ぎれにとっ組み合い
をしていたときに
ころんで負傷した
“すくなひこのみこと”
が湯にひたったところ

ろたちどころに負傷がなおったといい それ以来 温泉の利き目が広く知られるようになったのだという。 こうしたおのころじまに端を発した一連の神話は 国土創成 というかたちではないにせよ やまとたけるのみこと や 弘法大師など 名僧知賢にからむ伝説として 各地の温泉 いずみ みずば あるいは洞くつの探さくなど 地方地方の開発の歴史の上に 神話よりもいくらかは もっともらしく 場合によると もっとずっと信頼できる内容でもって語りつがれている。

1700年代の末期から1800年にかけて この神話にいう おのころじまとその一族は 伊能忠敬といった人たちによって その島のかたちが地図として描きだされるようになり やがて 1800年代も後半なかばを過ぎるころからは 欧米の学者に教えを受けた地球のお医者たちが 全力を合わせて おのころじまから 次々に生みだされた この日本列島をつくっている 岩石や地層を研究しだしたというわけである。 そして数からいえば そうした専門のお医者たちよりはるかに多数の人たちが鉱石を探したり 石炭や石油を掘るため



地球のお医者

に山野を歩いて そのおみやげにいろいろの岩石や鉱石をみつけてきた。 島のかたちが複雑な上に その島のなかみも至って複雑多彩な関係からして その全体をくわしく知るということは なかなか容易なわざではない。 ともあれ これらの人たちは 色々の岩石や鉱石のあり場所 種類できかた あらわれかた しわのよりかた われ目やずれの具合い それらが組み合わさってできている山の歴史などについて 現代風に理解を進めてきているのである。

2億年前から3億年も以前 おそらく神話で語られているころよりはるかなむかしに お隣の中国大陸の方には大森林が繁茂していたころ 日本列島はまだたしかに深い海の底にあったと考えられる。 その後 海の底でできた岩石は 山をつくる強い力をうけて 日本の島々の背骨がおぼろげながら海の上に浮びでるようになり それが途方もなく長い時間をかけて 少しずつはきり輪かくを示すような風になってきた。 原始の日本の島が荒海の上に浮んでいたというわけである。

やがて 6,000万年か8,000万年ほど前のころになって この原始の日本の島々のまわりの海底につみ重なっていた厚い岩石の重なりが 2度 3度 長い時間をへだてておお規模な 地変に見舞われ その結果 前よりずっと土台のしっかりした山が原始の島々の上に築かれるようになった。 日本列島のあらましの レイアウト は地球のお医者にいわせると 中生代 と呼ぶこの時代にできあがったのだということが出来る。

いざなぎ いざなみのアベック神がまず原始の島 おのころじまをつくり ついで淡路島にはじまる 八つの島々をうみだした神話は まさにこのあたりに匹敵するのであって 時間的関連を無視して考えるなら 神話もまた 味合い妙なものがあるといわざるをえない。

当時 土台がぐらぐらしていたいまの東日本
そしてそれよりいくらか進化していたと思われる
いまの西日本 その西日本の方には東から西にかけ
なかほどにおおきな割れ目ができ その南側
はとくに激しくもまれてしわがより 山は折れ重
なって細長く山脈をつくり 他方北側では いろ
いろの方向にひびや割れ目ができて 山はあたかも
寄せ木細工のように割れ その割れ目にそって
地球内部から マグマ と呼ばれるいろいろの成分
を含んだ高温の液体が強い圧力をもって 威勢
よく地表めがけて噴きのぼってきた。大部分は
地中にとどまって大きな みかげ石の山 をつくり
ほんの一部は地表に噴きだして 多数の火山とな
った。 みかげ石の山は 長い間に雨風に削りと
られて やがて地表に頭をだすようになり 今に
していえば 中国地方や瀬戸内海一帯の島々をこ
しらえあげるようになったというわけである。

こうして海底にできた岩石はしわをつくって山
脈となり ひきちぎられて山塊となり ときには
マグマにつきあげられ さらにまたマグマ自身
よってこしらえられて 次第にその面積をひろげ
てきた。 北海道の西側や 阿武隈山脈の東側あ
るいは九州島の北部には小規模ながら石炭が そ
してまた東北地方の脊梁山脈の西側にあった深い
海底には数千mの厚さにわたって 原油や天然ガ
スを含んだ岩石が重なっていたが これらもまた
山をつくろうとすれば 地変によって造作なく山
になれるのである。

こうしたなかにあって 地変の一つが ちょう
どいまの静岡市の付近から
富士山の西 八カ岳のすそ
諏訪湖 松本市 そして北
アルプスの東ふもとをぬけ
て 新潟県の糸魚川市につ
ながる線にそって おお規



模な 陥没帯 をこしらえた。 大地溝 と
いうえらく立派な名がついているが この大
地溝は まさに いろいろの点で異なった東と西の
日本をはっきり境してしまったのである。 この
大地溝やその前後に東西両日本の各所にできた大
小の割れ目からは…… 多分 100 万年程度のむかし
になるのだが ……いっせいにマグマの噴出がみら
れ 青年期に育っていた おのころじま こと日
本列島全体が 激しい火山の爆発に見舞われるこ
ととなった。 地震もまた太平洋周縁にそう地殻
のウィークゾーンにそっている関係から 宿命的
にこの火山列島のあちこちを見舞うこととなり地
震断層と呼ばれるような 動くわれ目 生きてい
る断層が島のなかのあちこちに 50 何 か 所もう
ごめいているというわけである。

さてお隣りの中国では 日本にないような古い
岩石が広くひろがっていて 気象災害こそ多いが
地盤はきわめて安泰であるのに比べて “おのころ
じま” に端を発したわが日本では 気象災害も多
い上に 地震 地すべり 火山の噴火 地盤の沈
下などと “小地変” もすこぶる多い。 神話に
語られていることを現代風に意味づければ 地球
内部から噴きでてこようとする マグマが最初の
島 おのころじまを生み そのまわりに山が増え
ひろがって 現在のような 風光すこぶる美しく
はあるが やっかいな島々をつくったという風
にあとづけられるだろう。 してみると神話をつ
くった日本民族はすでに古くから……少なくとも地球の
お医者さんのいなかったむかしから…… 経験的に 地球
科学的な宿命を感じとっていたのでないかという
風に思われる。

〔本文をかくに当っては 一部分を 富山房の日本童話
宝玉集から取材 借用した はじめの絵 2 枚もその中
にある絵をもと図にしている 以上お断りしておく
なお 次回 No. 3 は “足でかせぐ科学者” の予定〕

(筆者は地質部長)